

コリント人への手紙第一4章 「思い上がった人たち」

1A 管理者たる指導者 1-5

1B 忠実さ 1-2

2B 主による評価 3-5

2A 指導者に対する思い上がり 6-13

1B 王様のような振る舞い 6-8

2B 見せしめにされた使徒たち 9-10

3B 受難の中の愛 11-13

3A 愛する子に対する諭し 14-21

1B 父と子の関係性 14-15

2B 生き方の模範 16-17

3B 力による対処 18-21

本文

コリント人への手紙第一 4 章を開いてください。パウロが今、派閥の問題に取り組んでいます。彼らは、私はパウロにつく、アポロにつく、ケファにつく、キリストに付く、というように仲間割れしていました。一方について、他方に反対するということをコリントの人たちはしていました。

それでパウロは、自分たちが誰なのか、どういう存在なのかを説明してきました。3 章で、「あなたがたが信じるために用いられた奉仕者」だと言いました(5 節)。しもべにしか過ぎないのです。私たちの肉の弱さは、しもべにしか過ぎない者たちを持ち上げ、彼らに依存し、また帰属して、そのつながりの中で満足し、誇るということがあります。私たちの仲間であれば、カルバリーチャペルにいるということが誇りになり、他の群れや教団の人々は、何か自分たちより神から離れているかのように見なして高ぶることです。それはまさにコリントの人たちが犯した派閥主義です。キリストの内において、たまたま自分はこの群れに、この教会に召され、導かれているのだ。すべてが自分のためにあり、自分はキリストのものというところに居場所を見つけているか？ということなのです。

パウロは、続けて、自分たちが誰なのかを説明していき、そして派閥意識の中にある思い上がった姿について、それがいかに間違った態度であるかを教え。

1A 管理者たる指導者 1-5

1B 忠実さ 1-2

¹人は私たちをキリストのしもべ、神の奥義の管理者と考えるべきです。

コリントの社会は、ソフィストと呼ばれる知者は主人のような存在です。そこで、教会の指導者らを彼らはそのようにみなしたので、それでパウロにつく、アポロにつくと言っていました。けれども、パウロは、彼らの思いを打ち砕くような言葉を使いました、「しもべ」です。ローマ社会は奴隷社会でした。いろいろな奴隷がいました。ここのギリシア語「フペレテス」ὑπηρέτης は、船の底でオールを漕ぐような奴隷のことです。パウロも、他の使徒たちも自分たちを「しもべ」と呼んでいますね。例えば使徒ヨハネは、パトモス島で啓示を受けた時、「しもべヨハネ」と呼んでいます（黙示 1:1）。

そして、その主人が誰かと言いますと「キリスト」なのです。キリストという方をあがめるために、この方の命令に従うために生きている者たちです。この方に召され、この方に選ばれ、この方に仕えます。私たちは、奉仕者の心得の学びで、このことをじっくりと見ています。だれに仕えているのか？人ではなく、キリストご自身です。ですから、人を持ち上げたり、引き下げたりしている彼らの議論がいかに愚かであるか分かりますね。キリストが主であり、私たちは各々がこの方に仕えていますし、人の間に上下を付けていること自体が教会においては愚かなことです。

そしてパウロは、「管理者」とも言っています。このギリシア語「フペレテス」は、船の底でオールを漕ぐ奴隷という意味合いだけでなく、もう一つ、主人の財産を管理する奴隷の意味も持っています。財産を管理して、必要な時にお金を引き出す働きをしています。何を管理しているかという点、「神の奥義」ですね。私たちはこれまで、十字架にある神の奥義を見てきました。それがいかに知恵深いことか、神の永遠のご計画の中で、この世の知者や権力者でさえ全く知ることはできなかった知恵です。

イエス様は弟子たちについて、彼らが管理者であることを次のように語られました。「マタ 13:52 こういうわけで、天の御国の弟子となった学者はみな、自分の倉から新しい物と古い物を取り出す、一家の主人のようです。」私たちが、大きなホームセンターのようなところに行き、買いたいものが持つからない時に、すぐにどこにあるかを察知して持って来てくれる店員がいるととても助かりますね。または、大きな図書館に行って、自分の探している本が見つからないけれども、見事にそれを見つけてくれる図書館員がいると、とても助かります。同じように、使徒たちは新約聖書によって、私たちに神の奥義を、自分たちの生活にどのように当てはめればよいのかを説明してくれています。また、牧者や教師は、その使徒たちが教えた神の奥義について、どうなっているのかを適宜、人々に分かち合っていくのも、この管理者の作業です。

² その場合、管理者に要求されることは、忠実だと認められることです。

「忠実」であり、成果ではないのです。どれだけの人を引き寄せることができるのか競って、自分の考えや教えを言い広めるのが、福音宣教者たちの務めではありません。コリントの人たちは、ソフィストの人たちがそうやって自分に従う人々を作って行ったのですが、使徒たちは、神に対して

「忠実」であることが問われているのです。イエス様のタラントの喩えで、しもべたちに、「良い忠実なしもべだ」と主人が言ったのを思い出してください。みなさんが、どれだけすぐれた成果を挙げたか？は考えなくてよいのです。その時、その時で、いかに希望を失わず、主の目を向け、この方のところに憩い、その恵みによってこの方について行ったのかが問われるのです。

そして教会の指導者は、神の奥義を忠実に伝えることがその務めです。聖書に何が書かれているかを、自分の意見を差し挟まずに解き明かしていくのです。私個人の証しを分かち合いますと、私は 22 歳から説教を始めました。けれども、カルバリーチャペルのスクール・オブ・ミニストリーで、聖書の講解説教の授業があり、先生からこう教わったのです。「あなたが、神のことばを力強いものにするのではない。神のことばはすでに神の力であり、あなたがみことばを理解するのに聖霊の力が要る。」私は愕然としました。聖書を教えるのではなく、聖書から自分のメッセージを作り出すことが説教だと思っていたからです。それから、全く、教えることが出来なくなりました。語るのではなく、ずっと主から聞いていく時期が 1-2 年続きました。

このように、神の奥義を忠実に伝えるのです。大事なものは、福音そのものであり、神の奥義そのものなのです。話しぶりによって比較していること自体、焦点がずれています。「アポロ先生は、このようなことを話した。なんてすばらしいのでしょうか。」とか、「パウロ先生のメッセージはどうしようもないね。」などという比較や批評は、的外れです。

2B 主による評価 3-5

³ しかし私にとって、あなたがたにさばかれたり、あるいは人間の法廷でさばかれたりすることは、非常に小さなことです。それどころか、私は自分で自分をさばくことさえしません。

パウロはここから、自分に反対する者たちのことを意識しながら話していきます。他の指導者に付いている人々が、パウロを批判していました。煽っている偽教師たちがいました。後からコリントにやって来て、「パウロは真正な使徒ではない」などと言って、それで自分の教えに人々を引き寄せていったのです。コリントの人たちは、そういった者たちに影響されて、パウロのことを上辺のところでは裁いていたのです。「Ⅱコリ 10:10 パウロの手紙は重みがあって力強いが、実際に会ってみると弱々しく、話は大したことはない」などと、言っていました。

そもそも、彼の主イエスご自身が上辺で裁かれていました。「ヨハ 7:24 うわべで人をさばかないで、正しいさばきを行いなさい。」と言われていましたが、それはユダヤ人たちが、細かい安息日の律法に関する解釈で彼を裁いたりして、神からのしるしでなければ、絶対にできない奇跡を行われているのに、イエスご自身が誰か、つまり、キリストご自身だという理解に至らなかったのです。

そして、パウロは人間の法廷で裁かれることもありました。宣教の旅で、裁判の場に引きずり出

されることは多々ありました。けれども、そうした告発にも、彼は真に受けていなかったのです。

ここに、彼のすぐれた態度があります。「非常に小さなことです」ということです。私たちはどうしても、人が自分をどう言っているのかを気にしてしまいます。非常に大きなものと捉えてしまいます。ましてや、他のキリスト者が自分のことを聖書の言葉を使って裁く時には、自分は果たしてその通りなのか？と深刻に悩むことでしょう。

けれども、パウロは「非常に小さなことです」と言っているのです。自分が神の奥義の管理者であり、キリストのしもべであると言いましたね。つまり、自分を評価して、裁くのはキリストご自身なのです。私たちは、キリストに従うことがとても重いことのようにみなしますが、実は軽いのです。この方に信頼し、付いていただけなのです。それだけシンプルなのを、他人からどう見られているか？という重荷や、自分自身の心にある重荷を背負って、それがキリストに従うことだと錯覚していることがあります。

「私は自分で自分をさばくことさえしません」という言葉も大事です。キリスト者が、自分はきちんとやっているのかと責めて、自分の内側ばかりを見て、落ち込んでいくことがしばしばあります。しかも、それがあたかも、信仰上していかなければいけないものとして考えて、ドツポにはまるのです。ここで、コーリー・テン・ブームの言葉を引用しましょう。「世界を見たら、あなたは苦痛で疲れる。自分の内を見たら、あなたは落ち込む。けれども、神を見たら、あなたは落ち着く。」¹自分の内側を見たら、ガラクタばかりですからね。落ち込みます。自分自身のことさえ、ある意味でほったらかしていればよいのです！なぜかは、次に書いています。

⁴ 私には、やましいことは少しもありませんが、だからといって、それで義と認められているわけはありません。私をさばく方は主です。

パウロは、コリントの人々が疑っているようなことについて、何もやましいことがないことを知っていました。だからといって、自分が完璧な人間だということを言っているわけではありません。自分が自分の行いで義と認められているのではないのです。けれども、なぜそこまで心を落ち着かせていられたか？と言えば、「私をさばく方は主です。」ということ。自分自身のことについては、主がすべてを裁かれることを知っていました。この方にさばきを任せているのです。そして、主こそが正しく、真実に裁くことのできる方です。

私たちは、日々、自分の信仰を吟味する時に、神のことばによって有体に自分を見て行けばよいのです。神はそこで、いちいち、自分を責め立てることはありません。すでにキリストの十字架に

¹ “If you look at the world, you'll be distressed. If you look within, you'll be depressed. If you look at God you'll be at rest.” Corrie ten Boom

あってその責め立ては釘付けにされたのですから。神の恵みの中で、自分自身を確かめ、そして聖霊に促されて前進しながら生きるのです。

⁵ ですから、主が来られるまでは、何についても先走ってさばいてはいけません。主は、闇に隠れたことも明るみに出し、心の中のはかりごと明らかにされます。そのときに、神からそれぞれの人に称賛が与えられるのです。

ここは、前回、午前礼拝で学んだところです。私たちには、キリストの裁きの御座の前に立つことが聖書には書かれています。イエス様が再び戻って来られて、教会を引き上げられ、各々を裁かれます。しかし、その裁きは罪に定めるものではなく、ここにパウロが言っているように、信仰の真価が試されるものです。火の中をくぐるようにして精錬され、罰ではなく、その反対、称賛が与えられるのです。忠実であることに対して、イエス様は「よくやった。良い忠実なしもべだ。おまえはわずかな物に忠実だったから、多くの物を任せよう。」と言われるのです(マタイ 25:23)。

このように、良いことも悪いことも正しく裁かれる方が来られるのですから、それまでの間は、「何についても先走ってさばいてはいけません」と言っています。コリントの人たちが行っているのはこれでした。そして、私たちキリスト者が、知識ばかりが増えて行って、自分がしもべであることを忘れてしまい、先走った裁きを行ってしまうのです。しかし、自分はキリストのしもべなのです。裁きは主人であるキリストにお任せするのです。私たちは、知りもしないことを知っているかのように判断する高ぶりを避けないといけません。しかしそれは、判断を一切するな、ということではありません。神の奥義の管理者であるので、聖書に書かれてあるところにおいて判断をします。けれども、それを越えて判断する時、先走った裁きをしていることになります。

主ご自身にしか分からないことがあります。それが、「闇に隠れたこと」と「心の中のはかりごと」であります。私たちには、すべてのことが知られていないのです。一部のみ、主が示されていることのみが知られています。ここにおいて、私たちは自制が必要なのです。詩篇の著者はこう述べました。「131:1 【主】よ私の心はおごらず私の目は高ぶりません。及びもつかない大きなことや奇しいことに私は足を踏み入れません。」ですから、闇に隠れたことや、心の中のはかりごとをすべて知っておられる主こそが、すべてを明るみに出して正しく裁いてくださるのです。

2A 指導者に対する思い上がり 6-13

1B 王様のような振る舞い 6-8

⁶ 兄弟たち。私はあなたがたのために、私自身とアポロに当てはめて、以上のことを述べてきました。それは、私たちの例から、「書かれていることを越えない」ことをあなたがたが学ぶため、そして、一方にくみし、他方に反対して思い上がることをないようにするためです。

以上、パウロは 1 章において、クロエの家の人から聞いた派閥問題について取り組んできました。彼は分かりやすく、自分自身とアポロに当てはめて問題の本質を解き明かしていきました。5 章以降で、パウロは、伝え聞いた他の問題にも取り組みます。その前に、これまでの派閥問題においても、これからの問題においても、根っこにある問題、「思い上がり」に取り組みます。

彼らの問題は、一つに「書かれていることを越えない」ことを学ばなければいけないのに、それができていなかったことです。聖書に書かれていること、使徒たちの手紙に書かれていることに従っていればよいのに、それを越えて、知恵や知識と称するものを取り入れていたことが、コリントの人たちの問題でした。大体、キリスト教会で混乱や分裂、騒ぎが起こっている時は、書かれていることを越えているからです。聖書の言葉や、キリスト教の言葉を使っているのに、尤もらしく、霊的に聞こえるのですが、いやいや、そこに何かを混ぜ物をしているので、付け足しているのが起こっています。

もう一つは、「一方にくみし、他方に反対して思い上がる」という問題です。これまでの派閥問題がまさにこれです。反対している時に、それは聖書に書かれていることではなく、実際は、だれかが言っていることに与して、その知識で高ぶって、異なることを言っているように見える人を攻撃します。例えば、「何々神学こそが最も聖書的なのです」とかいう人たちは、これに当てはまります。そもそも、神学というのは、聖書に何が書かれているかを理解するために、体系化したものなのです。聖書に何が書かれているかを見ていく試みなのですが、聖書そのものではないし、人には、知られていないことがあまりにもたくさんあります。それを自分の理解したことに基づいて、それこそが聖書的だとしていることは、自分の知識で高ぶっているに他なりません。

⁷ いったいだれが、あなたをほかの人よりもすぐれていると認めるのですか。あなたには、何か、もらわなかったものがあるのですか。もしもらったのなら、なぜ、もらっていないかのように誇るのですか。

どんな、知識においても、知恵においても、キリスト教において必ず間違っていると断言できることは、「神の恵みを忘れる」ということです。すべてが神から与えられました。もらっていないものは、何一つありません。何もないのに、いや、神から見放され、呪われるものはいくらでもあるのに、それでも、今の自分がいるということを知って、初めてすべての知恵や知識が生かされるのです。自分が一定のことを学んでも、あくまでも自分が、罪人なのに救われて、神の前に恵みによって立つことができている者という歩みを忘れたら、その知識は高慢に要素になりこそすれ、徳を高めることにはなりません。

⁸ あなたがたは、もう満ち足りています。すでに豊かになっています。私たち抜きで王様になっています。いっそのこと、本当に王様になっていたらよかったです。そうすれば、私たちもあなたがた

とともに、王様になれたでしょうに。

コリントにいる人々は、使徒たちからは教えてもらったけれども、それは基礎的なことで、私たちはその先を言っているという奢りがありました。そこでパウロは、「私たち抜きで王様になっています。」と皮肉を込めて言っています。具体的には、彼らは、この世における満足や豊かさに安住していたようです。

そして、「いっそのこと、本当に王様になっていたらよかったです。」ということですが、私たちは、ローマ人への手紙で、神の国が到来したら、キリストと共に統べ治めるという将来が計画されていることを学びました。それはキリストと苦難をともしているからこそ、キリストが栄光の姿に戻られたように、私たちも栄光の姿に変えられるという文脈でのことです。「8:17 子どもであるなら、相続人でもあります。私たちはキリストと、栄光をともし受けるために苦難をともしているのですから、神の相続人であり、キリストとともに共同相続人なのです。」

キリスト者になったということは、神の御国の支配の中に入れられたということです。この世において、この世から聖め別たれ、神のものになりました。ですから、この世が滅ぼされて神の国が到来する時までは、世から来る、悪魔から来る苦しみの中で、信仰のゆえに苦しむように召されています。イエス様が、世の勢力に対して光となられたので、苦しまれ、その後で栄光に入られたように、です。ですから、今、その栄光に入ったかのようにふるまうことは、時期が間違っています。ですから、教会の中で「あなたは、金持ちになるように召されている。すべてや病は癒される。」という教えを聞いたなら、それは偽りだと思ってください。

2B 見せしめにされた使徒たち 9-10

⁹ 私はこう思います。神は私たち使徒を、死罪に決まった者のように、最後の出場者として引き出されました。こうして私たちは、世界に対し、御使いたちにも人々にも見せ物になりました。

パウロは、これからコリントの人たちの態度と、自分たち使徒の姿を、皮肉を込めて対比しています。彼らは、すでに満ち足りた、豊かにされた王様のようにふるまっていたが、使徒たちは、「死罪に決まった者のように、最後の出場者として引き出されました。」と言っています。今の私たちの社会では存在しないものです。ローマ社会にありました。有名な観光地、ローマのコロッセウムなどがその舞台でした。

ローマは、「パンとサーカス」という言葉があって、皇帝が市民にパンを無料支給して、またサーカス、つまり娯楽を与えることによって、市民の不満を宥めていました。そのサーカスの部分、娯楽として、競技場でいろいろな催しがありました。その一つが剣闘士の戦いです。その血なまぐさい戦いで、人々が興奮します。どちらかが倒れると、勝ったほうが倒れたものを殺すべきかどうか、



観衆に尋ねます。親指を上にあげれば、活かしておけということ。下に下げれば、最後の息の根を止めろという意味です。それら観衆の意思を見て、参加している皇帝は最終的に生かすか、殺すかを決めます。この場においては、皇帝と民衆は同じところにいます。

エンタテで、一つになっているのです。だから、不満を解消させるのに大切な場となっていました。

それで、「最後の出場者」というのは、野獣が解き放たれる時の剣闘士のことです。ライオンなどの猛獣が解き放たれます。ですから、ここでは彼が死んでしまうことは目に見えているのです。そして死罪に決まった者が剣闘士にさせられていることが多かったです。彼らを放り出して、野獣に切り裂かれるのを観衆が見て、喜ぶのです。パウロは何と、こうした最後の出場者に自分たちをなぞらえているのです。コリントの人たちは、観衆の中にいる皇帝のようにふるまっています、我々は最後の出場者なのだとして、使徒たちに反対している彼らの姿を浮き彫りにしています。

そして使徒たちが、「世界に対し、御使いたちにも人々にも見せ物になりました。」と言っています。御使いたちがそこにいるのは、使徒たちの苦しみについて、神は必ず報いを与えてくださるという確信があるからです。黙示録 18 章には、大きな都バビロンが崩れ落ちたのを、御使いが宣言しています。こう叫ぶのです。「18:24 この都の中に、預言者たちや聖徒たちの血、また地上で屠られたすべての人々の血が見いだされたからである。」神は必ず、苦しみを与えた者たちに対して、苦しみをもちて報いられます(Ⅱテサ 1:6)。

¹⁰ 私たちはキリストのために愚かな者ですが、あなたがたはキリストにあつて賢い者です。私たちは弱いのですが、あなたがたは強いのです。あなたがたは尊ばれていますが、私たちは卑しめられています。

教会の指導者たちの姿と、今のコリント人たちの高ぶった姿を、ありありと対比させています。キリストにあつて賢い者とは、世においてうまくやっていると思われる、ふるまいです。そして富や知識において強くなっています。それから尊ばれているのです。なぜ、そのようにできているのか？

それは世と調子を合わせているからです。世に対して、十字架を宣べ伝えていないからです。光になっていないからです。世渡りはうまいのですが、キリストの証しを立てていないのです。

キリストのために生きるなら、私たちは必ず愚かなように見えてしまいます。例えば、「きちんとあいさつをしましょう。」というような、道徳的な教えであれば受けがよいでしょう。そうではなく、「あなたは罪人です。死ななければいけないほどの罪人です。死んで神にさばかれます。けれども、神はあなたを愛されて、ご自分の独り子を身代わりに十字架につけました。」こんなことを聞いたら、こいつ気が狂っていると思われるのが落ちです・

そして、キリストのために生きたら、自分の弱さ、脆さをさらけ出さないとはいけません。パウロは、きついのユダヤ人で、パリサイ派のエリートでした。けれども、自分が教会を迫害した者、罪人のかしらであることを語りました。自分に利点だと思われることを語らずに、不利になることを語っているのです。キリストのために生きる者は、互いに人生の負い目になるようなことを明かすことになります。なぜならば、そこにおいてキリストに出会っているからです。

そして、私たちはキリストのために生きるなら、卑しめられることがあります。午前礼拝でもお話ししましたが、村八分のようにされます。出る杭は打たれます。変な人に見なされ、仲間外れにされます。けれども、ある人が言いました、「出過ぎた杭は放っておかれる。」キリストにあつて愚かになりましょう。そこに落ち着いたら、放っておかれますから、自由にキリストを証しする道が開かれます。中途半端がまずいです。肉的クリスチアンの特徴を思い出してください、世の生活も罪意識が出て十分に楽しめません。教会の生活も、自分が世的なので罪意識が出てきます。吹っ切れるのです、キリストにあつて愚か者なのだと。

3B 受難の中の愛 11-13

¹¹今この時に至るまで、私たちは飢え、渇き、着る物もなく、ひどい扱いを受け、住む所もなく、¹² 労苦して自分の手で働いています。ののしられては祝福し、迫害されては耐え忍び、¹³ 中傷されては、優しいことばをかけています。私たちはこの世の屑、あらゆるものの、かすになりました。今もそうです。

これはパウロを始めとする使徒たちが、通ってきたところです。12 節の「労苦して自分の手で働いています」というところは、パウロなど一部の使徒たちだけがしていたことです。彼が自分の手で働いていたことについては、9 章で詳しく説明しています。

大事ななのは、そのような卑しめられた状況にいて、使徒たちは愛をもって応答していることです。「ののしられては祝福し、迫害されては耐え忍び、¹³ 中傷されては、優しいことばをかけています。」とあります。愛や善意によって、悪意に報いているのです。もちろん、私たちのありのままの

姿では、そんなことはできません。嫌なことをされたら、もちろん嫌です。けれども祈ります。キリストについてよく考えます。そして聖霊に満たされることを求め祈ります。キリストに従っていきましょう。そして、罵る人には祝福し、迫害する人には耐え忍び、中傷されても優しい言葉をかけます。

3A 愛する子に対する諭し 14-21

パウロは、これほど強い表現を使ったのは、すでにコリントの人たちと関係があるからです。知識によって思い上がっている彼らに対して、教会の本質は人と人のつながり、関係なんだよということを次に教えていきます。

1B 父と子の関係性 14-15

¹⁴ 私がこれらのことを書くのは、あなたがたに恥ずかしい思いをさせるためではなく、私の愛する子どもとして諭すためです。¹⁵ たとえあなたがたにキリストにある養育係が一万人もいる、父親が大勢いるわけではありません。この私が、福音により、キリスト・イエスにあって、あなたがたを生んだのです。

先にお話したように、パウロがこの教会を建て上げた後で、いろいろな教師がそこにやってきました。そして、その滑らかな言葉遣いによってコリントの信者たちを自分たちに引きつけてきました。けれども、パウロはここで初心に帰らせています。彼らの信仰の源泉は、パウロの教えた福音、彼の教えたイエス・キリストにあるのです。そこに信仰のルーツがあるのであり、その関係から彼らはどんなに切り離そうとも切り離せないのです。後から来た教師たちのことを彼は、養育係に喩えています。主人の子供を、養育係は学校の送り迎えをしたりしていました。そうやって養育はしているかもしれませんが、もちろん父親の関係には取って替えることができません。

私たちキリスト者が、うっかり忘れてしまうものがあります。それが、主イエスへの信仰は、主イエスとの結びつき、その関係に命があるのだということです。そして、主イエスにある関係は、同じ神から生まれた子どもとして、兄弟姉妹として、その関係に本質があることです。ところが、自分がこれだ！と思うような知識が与えられるや、今までの関係をあまりにも容易に断ち切ってしまう。個人が満ち足りる個人主義の信仰になってしまいます。今の日本社会の問題は孤独であります。まさに信仰生活の中に悪い意味での個人主義を混ぜている人々がいます。大切な兄弟姉妹の関係を自分の個人的な満たしのために犠牲にすることさえあるのです。

2B 生き方の模範 16-17

¹⁶ ですから、あなたがたに勧めます。私に倣う者となってください。

パウロは、大胆にも「私に倣う者となってください。」と言っています。11章では、「私がキリストに倣うものであるように、あなたがたも私に倣う者でありなさい。(1節)」とあります。言葉や知恵と呼

ばれているものに囚われているコリントの人々ですが、信仰の本質はその生き方に現れます。十字架のことは、人を救うための神の力と私たちは教わりましたが、御力の現れこそが福音の本質です。変えられているのです。パウロは、テモテに対して「敬虔の奥義」という言葉を使って（Iテモテ 3:16）、福音がいかに神を敬う生活に導かれるかを手紙の中で教えています。けれども、テモテが牧会をしているところには、知識によって高慢になり、言葉の争いをする病気にかかっていると云いました(6:4)。

しかし、イエス・キリストの福音は、その生き方に関わって来るものであり、その生き方を真似ることができるよう模範を示すのも、指導者の務めであり、キリスト者の互いの務めです。マケドニアにあるテサロニケの教会に手紙を書いた時に、こう言いました。「Iテサ 2:8 あなたがたをいとおしく思い、神の福音だけではなく、自分自身のいのちまで、喜んであなたがたに与えたいと思っています。あなたがたが私たちの愛する者となったからです。」

私たちは、主ご自身に「わたしがあなたがたに仕えたように、互いに仕え合いなさい。」と命じられました。これは、長い時間をかけて、少しずつ築いていくものです。この説教はすばらしい、この教会の人々はすばらしいとか、そういった一過性のものではないのです。一過性のことを求めている人は、またちょっとしたことで教会を去っていくことでしょう。神の家族は、家族なのです。兄弟姉妹なのです。そこにはそれぞれの生活があり、それぞれの生活の触れ合いがあります。その生活で信仰を働かせた証しがあります。そして私たちは、自分たちはキリストをかしらとする、同じ一つからだなのだという結びつきを持つことができるのです。

¹⁷ そのために、私はあなたがたのところにテモテを送りました。テモテは、私が愛する、主にあって忠実な子です。彼は、あらゆるところのあらゆる教会で私が教えているとおりに、キリスト・イエスにある私の生き方を、あなたがたに思い起こさせてくれるでしょう。

テモテは、パウロにとって特別な人でした。テモテへの手紙を読むと良く分かりますが、ここを読んでもわかります。コリントの人たちにとって、自分は、「福音により、キリスト・イエスにあって、あなたがたを生んだのです」と言いましたが、彼らがそのことを忘れてしまっていました。けれども、テモテはまさに、そのことをよく知っていた人なのです。「私が愛する、主にあって忠実な子です。」と呼んでいます。忠実であることが、神の奥義の管理者に要求されることとパウロが言っていたが、まさにその忠実さをよく示していたのがテモテです。

そして、パウロは、「あらゆるところのあらゆる教会で私が教えているとおりに」と言いました。これは、手紙の冒頭で彼が強調したことと同じです。「1:2 コリントにある神の教会へ。すなわち、いたるところで私たちの主イエス・キリストの名を呼び求めているすべての人とともに、キリスト・イエスにあって聖なる者とされ、聖徒として召された方々へ。主はそのすべての人の主であり、私たち

の主です。」

コリントの人たちは、その派閥争いのようなものを引き起こしているため、分派的な思いになっていました。つまり、「自分たち」と、その外の世界です。悪い意味での仲間意識が強くなり、いつの間にか自分たちの世界で壁を設けていて、外の世界が見えなかったのです。その中で、パウロのことに反対していたのですが、それは全くおかしいことは明らかです。パウロの伝えていた福音は、他の地域の諸教会で広く受け入れられているものであり、すべての教会の標準になっていたのです。自分たちは見えていると思っているのですが、その見えている高ぶりが、かえって周りが見えなくさせていました。

3B 力による対処 18-21

¹⁸ あなたがたのところに私が行くことはないだろうと考えて、思い上がっている人たちがいます。

パウロに反対している人は、彼が何をしても、そこに悪意を見つけることができます。テモテを遣わすとパウロが言ったら、本人は弱い人で、怯えているのだろうと見なすことができます。ローマ書や、テサロニケの手紙第一2章などには、パウロが何度となく行こうとしても、妨げられている様子が書かれています。コリントにも行くことを、以前の手紙で伝えていたと考えられます。けれども、まだそれがかなっていない。それで、テモテを遣わすと言っているので、ますますパウロ自身は行くことはないだろうと、侮蔑的に見なす者たちがいたようです。

¹⁹ しかし、主のみこころであれば、すぐにでもあなたがたのところに行きます。そして、思い上がっている人たちの、ことばではなく力を見せてもらいましょう。²⁰ 神の国は、ことばではなく力にあるのです。

主のみこころによって、自分がまだアジアのほうに留まっていることを、そうやって悪意に捉えているのに対して、パウロは脅しをかけています。しかし、これは必要な脅しです。その一部の者たちが煽って、コリントの信者たちが影響を受けて、福音の真理ではなく、人間的な知恵により頼むようになってしまったからです。羊飼いの務めは、羊を養うこともありますが、狼から羊を守ることもあります。羊には優しく接しますが、狼には厳しく対処します。そして、本人たちは偽教師でなくても、大きく影響を受けた者も、厳しく対処されなければいけません。

そこで、福音の本質に戻ります。それは、「ことばではなく力」だということです。もちろん福音は、ことばによって伝えられます。けれども中身の無い言葉使いや説得力ではないのです。永遠の結果をもたらす力なのです。パウロは、次の章において、罪を悔い改めてない者のことを、遠くにいても、彼をサタンに引き渡したとまで言っています(5:5)。パウロに与えられた霊的な力を思い出してください。福音を信じようとしていた、キプロスの地方総督を妨げる魔術師に対して、目を見えな

くしました。そういった御霊の力が与えられていました。

²¹ あなたがたはどちらを望みますか。私があなたがたのところに、むちを持って行くことですか。それとも、愛をもって柔和な心で行くことですか。

パウロが、テモテを遣わすなど、優しく対応しているところを、弱々しいというような悪口で返していくような状況の中で、パウロが考えているのは、いわゆる「お仕置き」です。親が子供に行う、お尻ぺんぺんです。親はそれだけの力と権威があります。その権威をいつも愛によって示していますが、子どもは時にその罪と頑なさから、やりたい放題します。コリントの人々がそうになっていました。ですから、痛みを伴う厳しい対処が必要になるかもしれません。

おそらく現状は、偽の教師がごく一部いて、そういった者たちを追い出すのではなく、受け入れていて、それが自分たちの寛容なのだということで誇っていたのでしょう。しかし、それによっていかに教会に悪と不正が膨らんでしまっているか知れないのです。寛容とは名ばかりの、思い上がりそのものでした。

教会の中に、このように愛をもって柔和に接することを弱いのだと見なして、高ぶって反対をする、何もないと争いを仕掛けてくることがあります。それを 3 章でパウロは、「キリストにある幼子」であり、「肉に属している」と言っていました。私たちは、愛によってのみしか養い育てられません。その愛を、一種の弱さであると見なして思い上がることのないように、私たちは祈っていきたいです。その愛は時に、親が子をしつけるように厳しい対処になるかもしれません。自分が持っているもので、もらわなかったものはないということ。すべてが恵みから始まっていることを忘れないようにしましょう。

The special feature of ὑπηρέτης, however, is that he willingly learns his task and goal from another who is over him in an organic order but without prejudice to his personal dignity and worth.²

私の友人や知人の牧者には、改革派という、宗教改革者のカルビンの流れを汲んでいる人々があります。とても良い交わりを持たせていただいています。改革派の流れにいるからこそ、辛辣に批判しているのを聞いて、驚きました。「カルビン主義者ってカルビン死後に勝手にフォローしてカルビンの名を使ったけれど、カルビン自身はキリストがあがめられ自分が低くなりたいから、どこに葬られたかも分からぬようにした。」³まさに、コリントの教会で起こったことが歴史の中で、現代にいたるまで続いています。改革派そのものが間違っているのではなく、その神学が聖書的なものとして、聖書と同列に置いていることが間違っているのです。カルビンによってもたらされた霊的な遺産に深く感謝し、敬意を持ちつつも、彼は神に用いられたしもべにしか過ぎないとして、キリストにあって学んでいる謙遜な態度が大事なのです。

² Rengstorf, K. H. (1964–). [ὑπηρέτης, ὑπηρετέω](#). G. Kittel, G. W. Bromiley, & G. Friedrich (Eds.), *Theological dictionary of the New Testament* (electronic ed., Vol. 8, p. 533). Grand Rapids, MI: Eerdmans.

³ <http://www.logos-ministries.org/blog/?p=7304>